

令和4年度
入学者選抜学力試験問題

国語（前期）

〔注意〕

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開かないこと。
2. この冊子の問題は15ページからなる。落丁・乱丁および印刷の不鮮明な箇所などがあれば監督者に申し出て、問題冊子の交換を受けること。
3. 監督者の指示に従って、4枚の解答用紙に受験番号および氏名を必ず記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された場所に記入すること。
5. 解答に字数制限のある場合は、句読点を字数に数えること。
6. 解答は、内容とともに、用語、表記、構文にも注意して書くこと。
7. この冊子は持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、あの問い合わせに答えなさい。

私たちは憲法によって基本的な人権を認められ、いわば自由社会を生きていることになつてゐる。しかしながら、法律によつて自由を権利として認められていることと、私たちが日常においてきちんと自らの考えで行動を選択していることは、直ちに同じことを意味するわけではない。問題は、私たちは実際の日常においてどのくらい自分の判断で自身の行動を自覚的に選択しているかである。

私たちは日常において実際に多くのことを選択しながら生きている。たとえば、私は朝起きたその瞬間からその日の服装であるとか、あるいはその日の食事のメニューであるとか、あるいはテレビでどういった番組を視聴するかとか、こうしたことなどをその都度自分たちで決めながら生きている。しかし、確かに私たちはこうしたことをその都度選択しながら生きているのだけれども、では私たちがそうした一つ一つの選択をどの程度までシングルに考えながらおこなつてゐるかというと、やや心もとないところもある。実際には、私たちは、こうした選択のほとんどをさして深く考へることもなく、なんとなく惰性でおこなつてゐるのではないかだろうか。

とはいゝ、私たちが日常の振る舞いのほとんどを惰性で決めており、深く反省的に検討しながらおこなつてゐるわけではないといふことが何か大きな問題なのであり、批判的に論じられなければならないことなのかといえば、もちろんそうではない。むしろ、日常の「些細なこと」までいちいち反省的に検討して決めなければならないとするならば、それは私たちにとって大きな負担となるであろう。したがつて、そういう「些細なこと」は、いちいち深く考へることなく、過去の体験をつうじて形成してきた習慣にしたがつて決めることが合理的である。私たちの意識の容量には限界があるので、すべての事柄について均等に意識を振り分けるのではなく、ほんとうに大切なことに対してだけ意識を集中し、そうでないことについては過去の習慣に委ねて、深く考へないようにすることが重要なのである。だからこそ私たちは、日常の「些細なこと」についてはできるだけ自動的に処理できるように定型化し、そしてそのパターンを維持することにフシンするのである。

いいかえれば、私たちが日常をスムーズに生きていくうえで、当たり前のことは当たり前でなければいけないのであり、だからこそその当たり前さが疑われるようなことがあつてはならない。当たり前のことが当たり前であるのは、それが当たり前だからではない。むしろ、私たちが自由な存在であるならば、私たちは当たり前のことを当たり前でなくすることができる。たとえば、目上のひとに対しては敬語や丁寧語で話をすることが当たり前であるとしよう。しかし、それは単に習慣としてそうなつているだけであり、その気になればいつだって私は目上のひとに対しても乱暴で粗雑な言葉づかいをすることができる。しかし、もし私にあえて目上のひとに対して乱暴で粗雑な言葉づかいをしたいと考える特別な理由がないのであれば、私は習慣にしたがつて目上のひとを敬語や丁寧語で話すようにしておけば、私は自身の意識を言葉づかいの選択のエテキヒにではなく、そのひととの会話の内容に集中させることができる。当たり前のことが当たり前であるのは、それが当たり前だからではなく、それを当たり前にしておくことのメリットがあるからなのである。

当たり前のことことが当たり前であると思うこと、これはいわば世界に対する基本的な信頼だといふことができる。当たり前だと思つていたことが、実は当たり前ではなかつたことが明らかにされたとき、私たちは混乱のただ中におかれることになるだろう。（中略）実際に、当たり前だったはずのことが当たり前でなくなつてしまつたとき、私たちは何が適切な選択で、何が不適切な選択なのか、そのことを判断するための拠つて立つ前提を失つてしまふことになる。とうぜんそのような状況では、私たちは、かりに選択の自由を認められていたとしても、実質的な選択をおこなうことなどできなくなつてしまう。つまり、当たり前のことが当たり前として通用せず、いわば世界に対する信頼が失われてしまった状況では、私たちは（かりに形式的には自由であることを認められていたとしても）ものごとを自由に選択することが困難になつてしまふのである。

したがつて、私たちの日常の世界は常識や慣習などによつてある程度定型化されているけれども、そうした基本的な決まりごとがあることと私たちが自由であることが直ちに対立するとは限らない。むしろ、私たちが実質的に自由に生きるためにこそ、私たちの世界はある程度定型化されている必要があるのである。

このとき注意しなければならないことは、定型化された世界で成り立つてゐる当たり前のことを「当たり前」として維持するこ

とは、私個人の努力だけでは達成しえないということである。たとえ私がそれまで当たり前だと思っていたことをこれからも当たり前のままで維持しようと思つても、私以外の多数の他者がそのような決まり^a」とを一斉に無視する、あるいは別の決まり^b」とに変えてしまうといつたことをしてしまえば、私一人の努力はまったく無力であり、それはもはや当たり前でなくなってしまうだろう。いわば、定型化された日常世界とは、ひとびとの間の協同的な努力によって達成されており、そして維持されるようなものなのである。

もちろん、「当たり前のことを当たり前として維持しなければいけない」としても、それはつねにいえることではない。もし私たちの日常における振る舞いが一〇〇%完璧にひとびとによつて協同的に達成されている決まり^a」とによつて支配されているのだとしたら、それこそ私たちは自由でなくなつてしまふだろう。だとすると、自由の問題を考えることの難しさの一つは、ここにあるといつていゝかもしない。^B私たちが自由であるためには、私たちは他者との間で成り立つさまざまな約束^c」とを尊重する必要がある。しかし、だからといってその約束^c」とをとらわれ過ぎてしまつてもいけない。このように、いつかんすると相反する二つの要請に同時に応えることが必要になるのである。

けつぎよく、私たちは「自由である」からといつてすべてのことを自分で決める必要はないし、もしそうしなければいけないとしたら「自由である」ことは私たちにとって単なる苦痛でしかなくなつてしまふだろう。大切なのは、その気になれば自分で決めることができるといふことであり、そしてそれがほんとうに重要なことであれば積極的に自分で決めようとすることなのである。

人間の自由意思ということについて、脳科学はさまざまな興味深い研究を明らかにしている。脳科学が明らかにするところによると、私たちが自分の意思で自分の振る舞いを制御しているように思つていても、それは必ずしも事実ではない。多くの場合、ひとは状況に対し理性的に判断するよりも以前に身体的にはすでに反応を開始しており、いわば行動に先立つて意思があるのでなく、意思に先立つて行動がある。このことはいつかんすると人間の自由意思というものが錯覚であり、人間の選択はいわば生物学的に決定されているのだということを示唆しているようにみえる。実際に、私たちの日常の多くの行為は、必ずし

も熟慮のうえ選択されているわけではなく、いわば惰性によつて選択されている。こうしたことを考慮するならば、複雑な社会的行為についても、人間の自由意思といったものは単なる錯覚でしかなく、いわば行為といつものものは社会的に決定されるようなものなのだといたくなつてしまふ。

しかし、このような脳科学の知見を、安易に社会的行為にひろげて適用してしまつことは危険であろう。なぜならば、社会的行為はつねに何らかの社会関係を前提にして選択されているからである。私たちが社会のうちににおいて「自由である」ということの意味は、私の振る舞いは私以外の他者によつては決定されていないことにあつた。したがつて、もし私を他者とみなす個人にとって、私の振る舞いが何らかの不確定性をもち、確実には予見できないとするならば、その他者にとって私は自由な存在とならざるをえない。なぜならば、その他者は私の振る舞いを決定しておらず、私の振る舞いはその他者にとって与件にしかならないからである。逆に、もし私にとって他者の振る舞いが何らかの意味で不確定性をもち、予見のしがたさをもつているとすれば、私はその他者を自由な存在としてみなさざるをえなくなる。ようするに、他者との関わりを前提とせざるをえない社会的な行為については、それがどのような内的プロセスを経て選択されたかに關係なく、互いの振る舞いが互いに対しても不確定なものとして現れている限り、ひとびとは社会的には「自由である」ことになつてしまふ。

このことをやや直観的にいえば、相手が大人であるか、子どもであるかに關係なく、また理的に判断されたうえでの振る舞いなのか、それとも単に感情的な振る舞いにしかすぎないのかに關係なく、その振る舞いが私にとって予見しがたいものであつたなら、それは他者が自由であったことのショウサとして扱わなければならないということである。^cだから、もしかりにこの世界のどこかに私の行動を一〇〇%確実に予見できる存在がいたとすれば、そのような神の目をもつた存在を前にしたときには私はもはや自由ではないだろう。そして、自然科学が人間の自由意思というものは錯覚であると主張するとき、実はこのような神の目が暗黙のうちに前提とされてしまつてゐるのである。しかし、私たちの社会を構成する一般のひとびとはこのような神の目をもちえないし、神の目をもちえない限りは「社会は、自由な個人の相互行為によつて構成されている」と考えることの方が妥当にならざるをえない。

もちろん、だからといって個人が周囲に関係なく自分だけの判断で自身の振る舞いを決めているといつてはいるわけではない。

脳科学をもちだすまでもなく、ひとびとの意識や行動が環境に影響されていることは自明のことであり、ひとびとがそうしたものから完全に独立しているわけではないことはいうまでもない。ただ、環境がひとびとの意識や行動に与える影響には個人差が大きく、最終的には個人が決めていると考えざるをえないということである。

ただいざれにしても、かりに人間が社会において自由であるとしても、自由であるあり方がつねに他者との間で相互化されることは重要である。なぜならば、自由であることが他者との間で相互化されているということは、同時に「自由であること」は、自身の行為(そして、その行為に帰結される結果)を制御できることと同じではない」ことを含意してしまってある(この意味でも、「自由である」ことを「自身の振る舞いを自身の意思で制御できる」と同一視することは適切でない)。

たとえば、結婚を具体的な例にして考えてみることにしよう。

ひとにとつて家族は、もつとも基本的な社会の単位だと考えることができる。そして家族のなかでは、ひとは比較的限られた人数の相手と相対的に長い時間を過ごすことになる。だからこそ、誰と結婚するかは、そのひとの人生において大きな意味をもつていて。もし望ましくない相手と結婚したならば、結婚はそのひとの人生にとつてネガティブな影響をもつことになるだろう。逆に、もし望ましい相手と結婚することができたならば、そのことはそのひとの人生にとつてポジティブな影響をもつことになるはずである。このような大切な意味をもつてている結婚だからこそ、「誰と結婚するか」は、誰か別のひとに勝手に決められるのではなく、自分の意思で決めたいと、多くの人が考えるだろう。

しかし、「自分の意思で結婚相手を決められる」ということがすべてのひとに同時にあてはまるなら、それはいま私がまさに結婚を望んでいる相手にもあてはまることでなければならない。つまり、私がそのひとと結婚するためには私はそのひとの自由意思によつて選ばれるのでなければならず、いいかえれば私がそのひとと結婚できるかどうかは私の意思(だけ)によつては決定されないとということなのである。私は誰とも結婚できるけれども、それは「私は望んだ相手と結婚できる」ことを保証するものではまったくない。

実はまったく同様のことを、仕事を例にしててもいえる。

ひとにとつて仕事は、生きていくうえでのもつとも基本的な営みの一つである。どのような仕事に就くかによって、生活水準が変わつてこざるをえないし、また何よりも人生に対する満足度に影響する。だからこそ、どのような仕事に就くかは、そのひとの人生において大きな意味をもつてゐる。もし望んでいなかつた仕事に従事しなければならないとするならば、そのことはそのひとの人生にとつてさまざまなネガティブな事態をもたらすことになるだろう。逆に、もし望んだ仕事に就くことができたとするならば、そのことはそのひとの人生にとつてポジティブな影響をもたらすはずである。このような大切な意味をもつてゐる仕事だからこそ、「どのようないい仕事に就くか」は、何か社会的な拘束によつて自身の希望と関係なく勝手に決められてしまうのではなく、ほかならぬ自分の意思で決めたいと、多くのひとが考えているはずである。

しかし、「自分の意思で仕事を決められる」ということがすべてのひとに同時にあてはまるなら、私は望んだ職に就くために私と同じ職に就くことを希望するほかのひととの競争に勝つことが必要になる。つまり、その仕事に就き、かつその仕事でもつて生活するのに十分な収入を得ることができるためにには、私は私と同じようにその仕事に就くことを希望していけるほかのひととの競争に打ち勝つ必要があり、いいかえればかりに自分で自分の仕事を選べたとしても、希望した仕事でもつてセイケイを立てられることまでが保証されたわけではない。私は自分の意思で仕事を決められるけれども、それは「自身の望んだ仕事で生きていくことができる」ことを保証するものではまったくない。

D 誰もが自由である社会では、ひとびとの間で自由が相互化されているために、かえつてひとは不自由を体験しなければならない。いわばそれは、「誰もが自由である」との帰結なのである。しかしそれでも強調しておきたいことは、「自由」社会では誰もが自分の意思で結婚相手を決めているし、そして誰もが自分の意思で仕事を決めているということである。

(数士直紀『信頼にいたらない世界 権威主義から公正へ』一部改変)

問一 傍線部アから力について、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。

問二 傍線部Aについて、どのような「メリット」があるのか、七〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部Bについて、なぜそのような必要があるのか、六〇字程度で説明しなさい。

問四 傍線部Cについて、「私はもはや自由ではない」のはなぜか、七〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部Dとはどういうことか、六〇字以内で説明しなさい。

―― 次の文章は荒谷大輔『使える哲学 私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか』の「正義」の章に収められたものである。これを読んで、あの問い合わせに答へなさい。

「正義」は、どのような意味で「正しい」のでしょうか。資本主義社会において「正しさ」が市場原理で決まる」とは「富」の章で見ました。アダム・スミスの道徳哲学は、みんなが共感できるものを「正しい」とする社会を構想するものでした。しかし、そうして流行に流される「正義」が一般化していく中で、一定の強制力をもつて「正義」を要求する立場もあります。少数民族や女性の権利を主張し、「^{注①}ポリティカル・コレクトネス」(政治的な正しさ)と呼ばれる「正しさ」です。^{注②}

「ポリティカル・コレクトネス」という言葉 자체は、もともと教条主義的な他者への批判を諫めるための言葉だったといいます
が、一九六〇年代になるとアメリカの公民権運動を背景にして文化的な多様性を守るための政治的なアクションを指すものとして使われるようになりました。そうしたアクションによって、たとえば「看護婦→看護師」など、差別意識の継続につながるような言語表現があらためられています。しかし、この「ポリティカル・コレクトネス」という考え方には、政治的対立が含まれている、一筋縄ではいかない問題があります。

具体例を見てみましょ。コム・デ・ギャルソンが発表した二〇一〇一二一年の秋冬コレクションのショーで、白人モデルに黒人文化のひとつとして見られることが多い「コーンロウ」という髪型をさせたことが、ポリティカル・コレクトネスを諫う立場から批判されました(「コム・デ・ギャルソン オム プリュスのウイッグに賛否 文化的な盗用批判に「過敏過ぎ」の声も」、Fashionsnap.com(11/11/2010年1月21日))。

コム・デ・ギャルソンは、二〇一八年の秋冬コレクションの発表時に二〇年以上ぶりに黒人モデルを採用しました。それは一九九四年以来黒人モデルを彼らが採用していないとネットで批判されたからでした。しかし昨夜、男性コレクションのショーでこの前衛ブランドは後退してしまいました。今度は白人モデルにコーンロウのウイッグを着けさせたのです。〔…〕

ヴォーグのレポート記事では、それは「奇妙」と表現されています。こう書かれること自体が興味深いですが、それは文化的なアイデンティティを形成するヘアスタイルについての差別と偏見を考えることです。（「ダイエット・プラダ」（ファッショング業界で働くトニー・リューとリンクゼイ・スカイラードが匿名ではじめた告発アカウント）のインスタグラムの投稿）

まず、このような批判の言葉が多分に扇動的であるのが目に付きます。というのも、この書き手が批判の「仲間」に引き入れて、いる『ヴォーグ』の記事には「奇妙な編み込みのウィッグ」とあるだけで、批判的な含みを読み取るのは困難だからです。それは公平な情報の提供というより、特定の「正しさ」へと意図的に導こうとしている感が否めません。「読者のみなさん、どう思いますか？」モデルの顔を見ればすべて分かりますよね」と続けて、伏目がちに見える角度のモデルの写真を見せるのですが、これも印象操作をはかるものとしか思えません。

ところが、この投稿はSNS上で広くシェアされてコム・デ・ギャルソンへの批判を呼び込み、コム・デ・ギャルソンから謝罪のコメントを引き出すに至りました。公平な立場から発せられたとは到底いいがたい発言によつて意図的に「炎上」が企てられることでその「正しさ」が示されたというわけです。

しかし、こうした扇動的な「正しさ」の申し立てに対し、必ずしも表には出てこない不満が蓄積します。アメリカのピュー研究所の調査（二〇一六年）によると「最近は言葉づかいに関して、あまりにも多くの人がほんのちょっととしたことで攻撃を受けるようになっている」と答えた人の割合は五九%で、もう一つの選択肢「他人の感情を害さないよう使う言葉にはもっと気を付けなければならない」を選んだ人は三九%でした。つまり、ポリティカル・コレクトネスの考え方賛成の人は四割弱で、六割のアメリカ人は「やりすぎ」と感じているのです。

また、多少保守的な政治色が入った研究所の調査ではありますが、七割の人が「ポリティカル・コレクトネスは社会が行うべき重要な議論を封殺している」と答える一方で、「政治的な雰囲気が、自分の考えを他人とシェアすることを阻害している。なぜなら、自分の考えをいうことで、他人の感情を害したと見なされるから」と答えた人が五八%もいたというデータもあります。

その傾向は保守層に顕著で、自らの政治的な立場を「強く保守的」とする人の七六%が、自分の考えを隠すと答えたということです。

これらの調査からは、ポリティカル・コレクトネスに対する反発が強くあることだけでなく、その反発自体が表立つては表現されにくいということが分かります。ポリティカル・コレクトネスの「正しさ」は、「正しさ」として世間に通る一方で、表には出ない反感が蓄積されているのです。

このような調査は、二〇一七年のトランプ大統領就任の「驚き」を裏づけるために実施されたものでした。リベラル派のメディアでは特に、トランプ大統領を支持する人が存在すること自体が都市伝説のようなものと見なされる傾向がありました。その「予想」を裏切つてトランプ大統領が選出された際、支持したのはどの層だったのかを明らかにする必要があつたわけです。

これは二〇一七年のアメリカの例ですが、同じことは二〇一九年のイギリスの総選挙でも繰り返されました。ジョンソン首相率いる保守党が予想に反して圧勝し、イギリスのEUからの離脱が確定しました。リベラル派の「自殺」を論じた『西洋の自死』(二〇一七年)の著者ダグラス・マレーは、総選挙の結果を分析する記事の中で、次のようなことを書いています。

——総選挙でリベラルな労働党が辛うじて勝てたのはリベラルな富裕層が住む地域だけで、従来の労働党の支持基盤だった労働者層は保守党に投票した。ところが、リベラル派の人々は「負け」を認めず、選挙後の討論番組でも「この国の人々は、非常に急進的な左派政策を支持している」と自説を繰り返すだけだった。彼らは「^{注④}エニー・エンバー」の中で反対者をブロックし、自分たちの支持者の声を「世論」だと思っている。自分(ダグラス・マレー)も、リベラル派からレッテルを貼られ、口汚く罵られてきたが、そこには「醜い不寛容」があるだけだ。

マレー自身の政治的な立ち位置については、ここでは描きましょわう。彼の立場が公平なものといえないのは確かです。それでもこうした批判にはポリティカル・コレクトネスを推し進めるリベラルな左派に対する強い心情的反発が示されていることは分かります。マレーのように表立つて発言する人は限られていますが、そうした立場が潜在的な多数派を実際に形成していることは確かだといわざるをえません。「そんなはずはない」と「正しさ」を共有できる人々の間で共有するだけでは、両者を隔てる溝は

深まるばかりでしよう。表立つて表明されない「不正義」に対し、リベラル派がさらに語氣を強めて批判を展開しても、その言葉は、やはりリベラル派の「エロー・チエンバー」の中で響くだけです。

こうした心情的反発の蓄積自体に「公共性」の喪失を見て、さらなる啓蒙の必要性を感じる人々もいるでしょう。しかし、リベル派が懸命にその「愚かさ」を告発すればするほど、理念と現実の開きが大きくなるといわざるをえないと思われます。それは反発を抱える側から見ると極めて「不寛容」な態度のように見えるのです（実際、「多様性の尊重」を求めるリベラル派は、一般的に、リベラルな考え方を認めない人々に対しでは不寛容であるべきだと考えます）。

では、そのような「理念上の正しさ」の現実における不支持という構図は、どのようにして生まれたのでしょうか。あるいは同じことですが、リベラル派の正義は、どのような意味で「正しい」のでしょうか。リベラル派を代表する知識人の言説を検討することで、考えてみたいと思います。

ユルゲン・ハーバーマス（一九二九年生）というリベラル派を代表する知識人は、市場原理で決まる資本主義的な「正しさ」の設定に抗して、^B公共的な「正しさ」を再構築しなければならないと訴えました。つまり、かつて存在していた「正しさ」を復活させなければならぬというのです。

ハーバーマスによれば、近代の初期に芽生えた公共性のあり方は資本主義社会の進展によって変質したといわれます。市民がそれぞれに自分のオピニオンを示しながら、コーヒーhausに集つて政治的な議論をすることが、かつては行われていたというのです。一七世紀後半、お酒にかわる嗜好品として市民の間に広がったコーヒーは、酩酊ではなく覚醒をもたらすものとして、市民文化の象徴になりました。まさに近代革命の前夜、人々はコーヒーhausに集い、単なる酒の場の愚痴ではなく明晰な論理で、支配権力に対する批判的な意見を交わしたのです。女性はコーヒーハウスに来るものではないとされ、議論の場はあくまで男性のものでしたが、コーヒーハウスにおける市民の公共的な議論は、やがて新聞などのメディアを通じて拡大し、民主主義の成立に大きく貢献しました。

しかし、そうして不完全ながら実現した公共的な議論の場は、時代の経過とともに変化してしまったとハーバーマスはいいました。

す。近代社会が定着すると、政策の決定や執行は選挙で選ばれた代議員の仕事になり、市民が平時から公共的な議論をする機会は少なくなりました。「富」の章で見たように、資本主義社会において各人は、限られた視野で自分自身の欲望に従つて生きるよう促されます。「正しさ」の判定は市場の客觀性に委ねられ、神の見えない手をあてにして、各人は自分の目の前の仕事に没頭するよう促されるのです。目の前の仕事をこなし、自分で自分のキャリアを積み上げることに忙しい人々が、自分の利益に直接つながらない公共的な事柄を考えることに割ける時間は限られています。そうして、市場原理に支配される現実の社会で「公共的な議論」なるものの意義が低く見積もられることになつていったのです。

こうして資本主義社会における「公共性」への関わりは、むしろ「消費」を通じて確保されるものになります。自身の嗜好に応じてメディアを選択し「共感」を楽しむことが「公共性」のあり方になりました。反対意見にも耳を傾け、合意を目指して議論を積み重ねることは、そこでは目的とされません。政策を可能にする社会的な要件についての考察は欠いたまま、直感的に「いい」と思える候補者に投票することが、政治に対する一般的な関わりとなります。共感の共同体を背景にして「消費者の権力」を振るうことが、社会に対する最も効果的な介入方法として用いられることになるわけです。不快と感じるものにはクレームを入れてネットで吊るし上げることが「社会」を変えるための有効な手段になりました。

C 資本主義社会における「公共性」は、こうして、消費することを介して社会に関係する場を形成することになつたのです。

ハーバーマスは、消費者たちのものへと変質した公共性をあらためて市民の手に取り戻す必要があると訴えます。そのためには、人々が理性的な議論をして物事を決める「熟議民主主義」を実現しなければならないといわれます。人々はそこで自分の意見を明確に述べると同時に他人の異なる意見にも耳を傾け、互いに納得しながら各自の意見を修正し、合意に至ることを要請されます。開かれた議論の場で時間をかけて話し合い、互いに納得できるかたちで物事を決めていくのが本当の意味での「公共性」だというわけです。ハーバーマスにとって「近代社会」はいまだ実現を見ていない「未完のプロジェクト」であり、人々は互いに協力しあいながら、その完成を目指さなければならないとされたのでした。

では、そのような議論は、どのような意味で「正しい」のでしょうか。実際こうした議論は、誰もが同意せざるを得ない理想的

な政治のあり方を示しているように思われます。少なくとも「」のような社会を目指そう」という人に表立つて反論することは、非常に難しいと感じられるでしょう。公明正大な議論で物事を決めていこうという理念には、反論を許さない「正しさ」があるようになります。

それでもこの議論には、理念が先に立ちすぎている側面が否めません。社会はこのようなものでなければならぬ、という理念が先に立てられ、その実現がどれだけ現実的でありうるのかについては考えられていないように思われるのです。例えばハーバーマスのいう熟議民主主義では、理性的に議論を積み重ねさえすれば人々は合意に到れるはずだという理想が前提になっていますが、現実にはそう上手くはいきません。熟議民主主義の有効性が検討される中で、さまざまな事例が研究されていますが、熟議を重ねても互いの立場の違いが解消されない例は非常に多く見られます。

リベラル派の人々は、こうした現実における上手くいかなさを啓蒙の不足と批判することになるでしょう。現実に上手くいかないのは、理性的な議論をきちんとしないからだと考えられます。みんなが同じように理性的な存在者として振る舞えば、互いの立場を越えて合理的に「正しい」結論を共有できるはずだというわけです。しかし、（中略）私たち全員をあらかじめそのような「理性的存在者」と考えるカント以来の近代の理想は、理想にすぎません。「理性的存在者」であることは、生得的なものでは決してなく、特定の理念にコミットしてはじめて成立するものだと考える必要があります。「理性的存在者」であることを、個々人が同意した覚えのないまま前提にすることは、ある種の強制によってしか成立しないと考えられるのです。コミットした覚えのない人までコミットするのが当たり前だと考えるところに、この手の正義の困難があります。リベラル派の正義は、つまり、理念の上でのみ「正しい」ことを、すべての人に当然のように求めるという点で構造的な困難を抱えているのです。

D ハーバーマスがいうような「公共性」は、少なくともかつては現実に存在していたのだから、単に理念上のものではないといわれる方もいるかもしれません。ハーバーマスのいう「公共性の構造転換」が起きる前には、不完全ながら市民的な議論が社会を実際に変える力になっていたではないかというわけです。資本主義によつて変質してしまつたとはいえ、市民社会を実現した「公共性」が、かつては存在したのであれば、それを取り戻しきさえすれば「未完」の近代を完成させることができるように思われます。

しかしながら、かつて存在したといわれる「公共性」は、資本主義へと変質したのではなく、むしろまさにその「資本主義社会」を成立させるものだったということを思い出す必要があるでしょう。コーヒーハウスの議論は、自由経済を確立し、資本主義社会を実現するための「革命」を実現しました。そこで成立した「近代社会」とは、アダム・スミスがいう「自由」を人々に与えるものでした。各人が限られた視野の中で自分の欲望に従つて行為する「自由」は、神の見えない手の働きによって経済発展をもたらします。スミスによつて実現した道徳の民主主義は、一般性の高さを唯一の「正しさ」の基準にする正義だったわけです。

そのような「革命」は確かに実現しました。しかし、それを実現した「公共性」が「資本主義化」するのは当然の成り行きです。「市民的な議論」によつて目指されていたのは、資本主義的な公共性だったからです。その意味では、市民が熟議によつて物事を決めるというかたちでの「民主主義」は、いまだかつて存在したことはなかつたといわざるを得ません。各人がそれぞれに自分のオピニオンを表明し、互いの納得によつて物事を決める社会は、その限りにおいて、一度も実現したことのない理想にすぎないといわなければならぬのです。

(荒谷大輔『使える哲学 私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか』一部改変)

注 ① 「ポリティカル・コレクトネス」(政治的な正しさ)——被差別者や社会的マイノリティに対しても利益をもたらす認識や表現を是正する姿勢や運動のこと。

- ② 教条主義——特定の原理や原則に正当な理由なしに固執する態度のこと。
- ③ コム・デ・ギャルソン——ファシズム・ブランドの一つ。
- ④ エロー・チエンバー——自分たちが信じている同じ意見が反復される閉鎖的コミュニティのこと。

問一 傍線部Aについて、筆者によれば、どのような政治的対立が含まれているのか、八〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部Bについて、どのような「正しさ」か、七〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部Cはどういうことか、一三〇字程度で説明しなさい。

問四 傍線部Dで述べられている意見を筆者は批判している。それはどのような批判か、一一〇字以内で説明しなさい。